

ドーナツ屋で語り明かした青年の、探究的な人生

時代の象徴

同業者として堀川高校を調査したことがある。堀川高校の探究を丸裸にして、そのノウハウを明らかにすることが私の任務であった。その関係で堀川高校でのSSHの報告会に潜入調査（というか、普通に参加）した。全国から集まった聴衆の前で報告をしていたのが「飯澤功」であった。私はすぐにその様子を見て、堀川探究の要が彼であると確信した。圧倒的な存在感、そして、「探究の依り代」のごとく、流暢で的確なコメント。

実際に飯澤は文部科学省への報告やコンソーシアム京都での発表などでその名前が目立つようになっている。校務分掌としても、入試や広報、探究活動の開発を担う部署の長をしている。対外的にも校内的にも彼のプレゼンスは重要なものとなっているのである。

堀川のスポークスマン、探究の要、それ以外に飯澤の存在は現代の探究活動を語る上である種「時代の象徴」的なものを持っている。彼はいわゆる「特免」、特別免許²で教壇に立っている。そのよう

— 教員免許上を持っていないが優れた知識経験等を有する社会人等を教員として迎え入れることに

な特別免許で教壇に立つ。パターンは何人か見てきたが、その多くが高い専門性を有する人物で、たとえば、一流企業の元技術者や博士号取得者などである。そして、そのような教員は概して学校改革の中枢に位置することが多い。つまり、学校に入る外からの風として招かれるのである。

近年、博士号取得者を優先的に採用するようなシステムをとっている教育委員会が出てきている。それはSSHなど高度な科学教育を施すための人材確保という面があるとともに、従来の教職課程出身者だけでは学校改革が難しいという現場の要請があると考えられる。飯澤は博士号取得者であり、このような傾向の初期の人物である。そういう意味では飯澤は時代を反映した象徴的な人物でもある。

新しい校舎、新しいカリキュラムを作った堀川にとつて、そこで行おうとした「新しい学び」を実質化する人材が必要だった。その人材の一人が飯澤であった。このように考えたとき、堀川の奇跡を裏で支えた一人が飯澤であったことが分かる。このようなことは堀川、あるいは学校教育に限らず、高等教育、人材開発の視点からも重要となるだろう。いわゆる理系のポストク問題のまっただ中にいた博士号人材が学校改革に貢献したということは、博士人材が一般社会で有意義な人材であるという

より、学校教育の多様化への対応や、その活性化を図るため、授与権者（都道府県教育委員会）の行う教育職員検定により学校種及び教科ごとに授与する「教諭」の免許状。文部科学省HP

(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/07/28/1348574_1.pdf) 閲覧二〇一五年三月二十日

証明であるとともに、一つのキャリアパスを提示するのであるから。

「探究的な人生」を可能にするもの

飯澤の講演に目を向けた。彼は学校現場で探究活動を行う意義について語る。学校現場における「探究」と「研究」の違いを飯澤は新知見の有無と考えている。学校現場には先行研究が自由に閲覧できるリファレンス・システムが確保されていない。新知見を示すということが原理的に難しいのである。それに対して科学コンテンツなどでは新知見が求められる。このような矛盾において、飯澤はコンテンツ等での評価よりも探究活動の楽しさを子どもたちに知ってもらうことを重視する。

飯澤はプロフェッショナルである研究に対して、探究にアマチュアイズムを見いだす。このアマチュアイズムの涵養を探究活動の中心に配置する。飯澤のアマチュアイズムの原風景は彼が体験した大学生・大学院生時代の友人たちとのドーナツ屋での語り合いである。自由な知的対話、真理とともに追究する語り合いの文化。このような文化が作り出すものは何か。飯澤の語りから考えるとそれは「探究ジャンキー」や「探究的な人生」と呼ぶようなもの、自己形成の核心にあるもの、つまりは「探究の力」（能力）ないしは「探究愛」（態度）と呼ばれるものである。

「探究愛」の使徒としての大学院生

飯澤はこの「探究愛」に満ちた臨床場面でのエピソードを披露しながら、探究活動の広がりを描き出す。

一般的に考えて、生徒とともに比叡山にまでドライブして実験をすることやアイロンシャツのしわについて討論するということは「探究愛」を持ち合わせない者にとっては余計な仕事と映るかもしれない。教える人間と学ぶ人間との精神的な共鳴、つまり、探究に対する「愛」と呼ばれる次元での共感が重要になってくるのである。

そのために、教える人間は学ぶ人間以上に、その関係性を、つまり、教える人間―探究の対象―学ぶ人間の三項関係を楽しまないといけないのである。この三項関係を愛という次元において教える人間が楽しむという構造、このように飯澤の探究思想が描き出されるだろう。

このような関係性において教える人間と学ぶ人間が結びつくために、探究活動が生徒指導などの学校教育全般に一種の汎用性を持つことになる。教育に必要とされる、いわゆる「信頼関係」が探究活動において育まれるということである。

このような「探究愛」が飯澤自身に育まれたのがあの学生時代のドーナツ屋であったなら、彼が大学院生のTAに人生のモデルとして生徒に対峙してほしいという期待の理由に合点がいく。大学院生

は飯澤と同じく「探究愛」を持って生徒と関わり、生徒を「探究愛」へと導く使徒なのである。

大学院生は単に探究の力を有した技術補助、教育補助以上の意義を持ってこの仕事に望むように考えられるのである。

余白の喪失

ところでこのようなアマチュアイズムの「探究」はプロフェッショナルな「研究」とどのような関係を持つのであろうか。当然ながらアマチュアイズムがプロフェッショナルリズムの下地や裾野と考えられる。つまり、探究基礎は研究のための基礎であるという考えである。

彼の語りを見ていくとその関係は単に探究が研究の準備段階以上のものを持つと考えられる。飯澤は研究体験を積んだ博士人材に対して、現場には多くの研究対象が存在すると指摘する。それは探究活動の指導法であったり、評価法であったりするが、一方で質疑応答の最後で探究の指導については「道楽」と言っている。

この点に注意したいのは、現状の研究事情を考慮したときに学校現場での探究と大学での研究が持つ大きな差異を浮かび上がらせたいからである。大学での研究は研究職にとつての「仕事」である。そこでの成果（新知見の発見）は研究職に就くものにとつての評価につながる。そのため、生活に影

響のある研究活動は「道楽」ではない。

近年はこの成果を求めるプレッシャーが強くなっている。そうなってくると飯澤でいうところの「ドーナツ屋の語らい」も、直接的に研究成果に結びつかないのであるなら、切り捨てられる傾向にある。それはとくに——私自身の経験で言えば——生産性が高いとは言えない研究室においてみられるように感じる。生産性が高くないからプレッシャーをかけられると余白と思われる部分を削ぎ落としてしまふ。生産性が高い研究室はむしろ、そのような余白を有効に利用して学際的な研究にいそしんでいる。

飯澤の「道楽」というフレーズからイメージを膨らませ考えたいのは、「研究」環境の熾烈化とともにその中での研究室文化の劣化であり、大学の研究現場の持つある種の「余白の喪失」である。必ずしも生産性が高いというわけでもない研究室において——つまり大概の研究の現場において——重要になるのははや「探究愛」を培う「ドーナツ屋の語らい」ではなく、受験テクニックに近い研究生産テクニックなのである。

探究は私たちの手に、失われたものを取り戻してくれないか

荒廃した大学での研究の現実に対して、学校現場での探究にかつての牧歌的な、あるいはより高度

で生産的な研究文化を涵養する可能性が残されていると考えられないだろうか。学校現場の探究は、プロフェッショナル化されることで生じてしまった優等生的世界観の極地としての大学研究に対して、ある種のアンチテーゼとして存在できないだろうか。そして、そのアンチテーゼの裏側に優等生的世界観が手に入れることのできない、革新的な研究世界への迂回ルートを描けないか。

このように考えたとき、私たちが向かうべき道は探究活動の中に荒廃した研究活動の植民地を作り出すこと、つまりは研究成果とそれによって評価されるプレッシャーの中でもはや真に創造的であろうとすることができなくなってしまった「並の研究」のミニ版を作ることではないだろう。単なる「研究テクニク」の押しつけなど、いらぬのである。必要なのは「探究愛」を持った「探究的な人生」とそのような人生が交流する「ドーナツ屋の語り」なのである。